

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第46回 「時間」が証人 ～ 待たせるなら、待ったほうがいい

私の父が、日本税理士会連合会の現職の会長だった時の話である。近代生保業界のドン・元日本生命社長の故川瀬源太郎氏と衝突した事があった。その発端は、たわいもない「時間」のことだった。

その日、特に体調が優れず、それでも待ち合わせ時間が迫っていた父は、偉大な、超VIPに失礼の無いようにと、某ホテルに、30分前に着くように出発していた。かれこれ、約1時間近く待たせようか、ついで、ボス・川瀬源太郎は現れなかった。

やがて、秘書と思しき人物が青息吐息で駆け寄って、失礼を詫びた。父は軽く会釈をしたきり、無言でその場を立ち去った。翌日、川瀬ボスは、数人の部下を引き連れ、日税連の会長室に現れた。

「あなたがどれだけ偉い人か知らんが、約束した時間すら守れないとは、大変残念に尽きる。時間はあなただけのものではない！思い違いをするな！」。会長室の外にも響き渡る程の勢いだった。この時の父を見て、「かっこいい」と思った。

「誠に申し訳ございません」、あの大社長が、今まで何人の人に頭を下げたことがあるのだろうか？ 並み居る部下の面前で、深々と土下座をした。異様な空気が流れた...

この時、情報伝達ミスで、川瀬氏は面談予定を知らなかった...と後で聞かされた。そんな弁解、一言も言わなかった川瀬社長、「やはりこの人、ただ者ではない！」。たかだか「時間」に遅れただけの話、大の大人が何を...、と思うかもしれないが、「いい話」である。

友人らとの待ち合わせで、待つ時間は25分、待たせる時間は17分、が現代日本人の限度のようである（時計メーカー・セイコーが実施したアンケート調査の結果である。2004年6月4日、朝日新聞）。待つほうが待たせるほうより8分長い、という結果に「ほっと」すべきなのか。

時間を守る、時間に遅れない...こんなことは、昔、大人が子供に教えたことである。守らない大人を、子供達は、どんな目で見たらいいのか、「しんどい話」である。

「時間」が証人になる。あなたの性格を、見事に物語る「証人」となりえる。

川瀬氏の例は全くの例外だが、概して、時間を守らない「奴」は決まっている。また、あいつのことかと、レッテルがついてしまっている。そんな大それた問題でなく、要は本人次第で、どうにでもなることではないか！ レッテルをつけたまま、偉そうな顔をしている「あなた」、みんなの笑いもんになっていること、ご存知か？ 一刻も早く、レッテルを取り外す行動を...。余計なことだけど、そのほうがいいに決まっている。